

とらうべ

どっちもいのち

小笠原 望

大野内科(高知県中村市)

ぼくは昨年の春から、高知県中村市の診療所で町医者をはじめた。医者となってからの20年間を高松赤十字病院という中核病院で過ごしたぼくは、ますます「何でもあり」の生のいのちと向かい合っている。診療所での診察は、検査機器もないし血液検査の結果もすぐには出ない。素手でけんかしているみたいで、これはこれで面白い。

「いのちばんざい 保育器も百歳も」

この川柳は、宮本時彦氏のぼくの大好きな作品である。

しかし、お年寄りのいのちが大事にされない時代になりつつある。ぼくは四万十川の赤鉄橋のたもとで診療しているが、一人暮らしや二人ぼっちの愚痴を聞くことが多い。旅人は景色を褒めるのだが、田舎には田舎の大変さがある。

病院勤務時代には、一般患者も産科病棟に入院していたので、助産婦さんとも結構一緒に仕事をした。

ぼくのなじみの患者さんが、救急車で休日に来院した。脳卒中の再発だった。部屋がなく、産科病棟の個室に入院した。したというより、させていただいた。その日、大丈夫だからというぼくの予想と違い、急変した。

あっという間に、下顎呼吸になった。部屋を移す間もなく、家族の見守るなかで臨終を告げた。

その時、死後の処置に困ったことを覚えている。産科病棟では人は死なないことに、初めて気がついた。

翌日、婦長さんからなぜICU

に移さなかったのかと叱られた。家族は満足して、流れはそれでよかった。ただ、急変の患者さんを一緒に懸命に処置してくれた若い助産婦さんに負担ではなかったかと、気になっていた。

ぼくは、分娩室によく入った。長女の出産の時、家内の手をぎこちなく握り続けた。そればかりか、患者さんに呼ばれて、ご主人のかわりに手を握って、出産に立ち会ったことが何度もある。不安の強い人には、「ぼくでよかったですら、お産に

は立ち会いますよ」と、ずいぶん約束手形を発行していた。

一度は夜中に分娩室から、「分娩が始まります」との電話。約束をすっかり忘れていたぼくは、急いで病院に向かった。落ち着かない廊下のご主人に会釈して、分娩室に入ったこともあった。

分娩室の助産婦さんは、きびきびしていて気持ちがいい。そして疲れ切った産婦に、「女の子ですよ」と、素早く赤ちゃんを抱かせて見せるシーンが、いつでもじんと来る。その場面に出会うたびに、「ご臨終です。お役に立てませんで……」と、口ごもる自分の姿と比べてしまうのだ。

この瞬間が、病院のなかの最も光輝く役得だと、いつも思っていた。そのことを助産婦さんに言うと、「いつも正常のお産ばかりじゃないですからね」と、答えるのだが。

生まれてくるいのちも、お年寄りのいのちも、どっちのいのちも尊重される時代が続くように、「いのちばんざい」を一緒に叫び続けたい。

